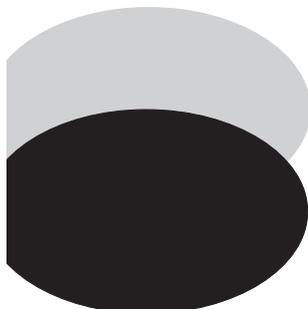


20190330

絵本学会 NEWS No.63

発行：絵本学会
発行日：2019年3月30日
編集：絵本学会広報委員会
絵本学会事務局：〒448-0852 愛知県刈谷市住吉町4-5
刈谷市美術館内 絵本学会事務局
E-mail office@ehongakkai.com
http://www.ehongakkai.com



絵本学会

第22回絵本学会大会開催のお知らせ
第3回日本絵本研究賞について
絵本セミナー「BIBと絵本制作の舞台裏」報告
絵本フォーラム「人生は回り舞台」参観記
各委員会からの報告
絵本学会Who's who
新入会員紹介
理事会議事録

— 第22回絵本学会大会（6月1日・2日 帝京大学）開催のお知らせ — 大会テーマ：絵本と教育—メディアとしての絵本、その魅力と多様性を探る

- ◆ 期 日：2019年6月1日(土)・2日(日)
- ◆ 会 場：帝京大学八王子キャンパス
〒192-0395 東京都八王子市大塚359
☎ 042-690-8214 (辻研究室 S1521)
- ◆ アクセス：一般来場者用の駐車場はありません。公共交通機関をご利用ください。
 - ①「高幡不動駅」から・京王バス1番のりば「帝京大学構内」行きに乗車(直行11分、各停13分)、終点「帝京大学構内」下車
 - ②「聖蹟桜ヶ丘駅」から・京王バス2番のりば「帝京大学構内」行きに乗車(直行15分、各停17分)、終点「帝京大学構内」下車
 - ③「多摩センター駅」から・京王バス4番のりば「帝京大学構内」行きに乗車(直行14分、各停18分)、終点「帝京大学構内」下車
 - ④「多摩モノレール 大塚・帝京大学前駅」から・徒歩約15分
 - ⑤駅からタクシーを利用する場合はおおよそ1,000円~1,600円程度
- ◆ 参加費：会員・準会員(院生など)：1,800円
一般(非会員の院生を含む)：1日/1,000円、2日/2,000円(当日受付)
学生(学生証を提示ください)：1日/500円、2日/1,000円(当日受付)
- ◆ 交流会会費：4,000円(事前申込み)
*近隣にコンビニ等はなく、学内の店も休みのため昼食を持参してください。
- ◆ プログラム
第1日 6月1日(土)
 - 11:30 ~ 受付 S1F中央玄関
 - 12:30 ~ 開会式 S B2F小ホール
第3回日本絵本研究賞報告
 - 13:00 ~ 記念講演
「メディアとしての絵本、その魅力と多様性を語る」
岩井俊雄(メディアアーティスト・絵本作家)
 - 14:45 ~ 研究発表① S517 ~ 520
 - 16:50 ~ 絵本学会総会 S517
 - 17:30 ~ 交流会 S21Fスカイラウンジ

- 第2日 6月2日(日)
 - 9:00 ~ 受付 S1F中央玄関
 - 9:30 ~ 研究発表② S517 ~ 519
 - 11:40 ~ 作品発表 S82(図工室)
 - 12:40 ~ 休憩 昼食は各自持参
 - 13:30 ~ ラウンドテーブル
 - A 「『絵本作家 かがくいひろし』と『教育者 加岳井広』を架橋するもの」 S517
話題提供者：鈴木穂波(岡崎女子短期大学)、沖本(堀内)敦子(ブルゾン新社)、櫻井やよい、奥津篤子(元千葉県立松戸つくし養護学校)、加岳井武志(実兄)
コーディネーター：水島尚喜(聖心女子大学)
 - B 「宗教と絵本—仏教・キリスト教・イスラーム教の絵本を通して」 S518
話題提供者：永吉敦郎(元鈴木出版)、山口恵子(北海道大学大学院)、前田君江(東京大学)
コーディネーター：森 覚(大正大学)
 - C 「ブルーノ・ムナーリの絵本と教育」 S82
話題提供者：岩崎 清(日本ブルーノ・ムナーリ協会)
コーディネーター：有福一昭(有明教育芸術短期大学)
 - 15:15 ~ 閉会式 S517
- ◆ 教材・資料展示 ご賛助各社による展示。両日とも。S82
- ◆ 関連イベント「第49回世界児童画展」帝京大学総合博物館S B1にて開催

第22回絵本学会大会実行委員会事務局(お問い合わせ先)
帝京大学教育学部初等教育学科 辻 政博研究室
メールアドレス：masatsuji@jcom.home.ne.jp

- ◆ 詳細は、同封の大会案内をご覧ください。
- ◆ 宿泊は参加者各自でお早めにご手配されますようお願いいたします。

第3回日本絵本研究賞について

「日本絵本研究賞」は2017年、絵本学会設立20周年を機に「日本絵本賞」を主催している毎日新聞社と全国学校図書館協議会の協力を得て、絵本に関する優れた研究論文や評論を顕彰する目的で設置されました。

●第3回日本絵本研究賞の選考委員会を終えて

本年度の論文の応募状況は昨年度より少ない5編(自薦3編、他薦2編)となり、日本絵本研究賞特別委員会は第一次選考を選考規則に基づいて行い、4編(自薦3編、他薦1編)の論文を決定し、本選考委員会へ推薦を行いました。

2月1日に開催された同選考委員会では、日本絵本研究賞規則第4条2項にしたがって全委員による互選の結果、満場一致で佐々木宏子委員が委員長に選出されました。委員長の司会進行により各委員による講評、及び審議が進められ、本年度は日本絵本研究賞、同奨励賞共に該当論文なしと決定いたしました。

選考会では、全体的に分析が不十分で説得力に欠ける、用語の用法や文章表現が不正確、取り上げる絵本や例示の絵本の選択への疑問、分析手法などについて厳しい指摘がありました。奨励賞にふさわしい論文があるとの意見もありましたが、選考委員会の総意には至りませんでした。

選考委員会からは、学会に対して「日本絵本研究賞」が絵本研究の発展に貢献するよう、賞のあり方について検討を行い、思いきった改善に着手すべきであるとの要望が出され、第3回の選考委員会を終了しました。

(報告：日本絵本研究賞特別委員会委員長 生田 美秋)

●第3回日本絵本研究賞 最終選考委員会

日 時：2019年2月1日(金)12時40分～14時30分

場 所：毎日新聞社5階503会議室

●選考委員(○は選考委員長)

今井 良朗(武蔵野美術大学名誉教授、元絵本学会会長)

川端 誠(絵本作家)

○佐々木宏子(鳴門教育大学名誉教授、元絵本学会会長)

村中 李衣(ノートルダム清心女子大学教授)

生田 美秋(富山県立高志の国文学館事業部長、日本絵本研究賞特別委員会委員長)

設案 敬一(公益社団法人全国学校図書館協議会 理事長)

小島明日奈(毎日新聞社執行役員 教育事業担当理事)

●第3回日本絵本研究賞 該当論文なし

●第3回日本絵本研究賞奨励賞 該当論文なし

*受賞論文がありませんので、論文の掲載はありません。

以 上

総 評

選考委員長：佐々木 宏子

第3回日本絵本研究賞は、残念ながら該当者なしという結果になった。対象となる応募論文は4編(自薦3・他薦1)で、これもまた、残念ながらとても少なかった。歴代の選考委員も述べているように、今回も選考の「難しさ」を痛感した。学会が設立されて、20年余、しかも学際的で傘下に数多くの専門分野を抱えている。限りなく学問分野が細分化する現代において、逆に、果敢にも統合化・総合化の方向を探ろうとしているのが絵本学である。まさに異質なものを、どのように統合すれば新しい創造物(絵本学)が創出できるかが、選考委員にも問われている。

その難しさは、自らの専門分野の視点からのみ対象論文を読むのではなく、それがどのような学問的な出自であるかに敬意を払いつつ、解釈・理解する作業がまず前提になるからである。それは、それぞれの学問分野が培ってきたリテラシー解体の痛みを伴うかも知れないし、新しい議論方法の開発なども要求されるだろう。絵本学の構築は、時間をかけて絵本学的「共通理解」を蓄積し水準を高めて行くしかないだろう。今回、研究賞に応募してくださった皆様にお礼を申し上げるとともに、来年度は、より多くの方々が応募してくださることを切に希望する。



2018年度 絵本セミナー 「BIBと絵本制作の舞台裏」報告

2018年度の絵本セミナー「BIBと絵本制作の舞台裏」は、奈良県立美術館との共催により、「ブラティスラヴァ世界絵本原画展 — BIBで出会う絵本のいま」の会期中の2018年11月18日(日)に、奈良県立美術館レクチャールームで開催されました。参加者は絵本学会会員が19名、一般が91名、合計110名となり、追加の椅子を出すなど、大変盛況な会となりました。

プログラムは、絵本学会研究委員で大阪国際児童文学振興財団の土居安子さんの進行により、丸尾美保絵本学会研究委員長のあいさつの後、絵本評論家でBIB2017国際審査委員長の広松由希子氏によるイントロダクション「BIBと日本の絵本」から始まり、絵本作家のこしだミカ氏による講演「わたしの絵本創作過程」、野分編集室の筒井大介氏による講演「これまでに見たことのない絵本を創るために」が行われました。休憩後、広松氏が聞き手となり、こしだ氏と筒井氏による対談「絵本の現在・絵本の未来」が行われ、質疑応答を経て、一旦閉会となりました。続いて、奈良県立美術館の飯島礼子学芸員によるギャラリートーク、最後には、こしだ氏と筒井氏と広松氏によるサイン会まで行われ、盛りだくさんで充実した絵本セミナーとなりました。

以下、絵本制作のリアルな現場を実感できた、熱気あふれる内容をご報告します。

広松 由希子 氏 イントロダクション「BIBと日本の絵本」

日本ではブラティスラヴァ世界絵本原画展と呼んでいますが、通称はBIB。英語ではBiennial of Illustrations Bratislavaの略ですが、スロヴァキア語でも、フランス語でも、ドイツ語でも、スペイン語でも、イタリア語でも、ロシア語でも、略すとBIBなんです。私はBIB日本巡回展のコーディネーターであると同時に、思いがけず今回日本で初めてのBIB国際審査委員長を務めたということもあり、最初にBIBの舞台裏について、どのように展覧会ができ、どのように選考が進んだのか、ご説明したいと思います。

BIBの会場であるブラティスラヴァは、スロヴァキアの首都です。奇数年に開催される、絵本原画の世界最大級の国際コンクールです。原則、過去2年以内に出版された絵本作品の原画が対象となり、各国から「15組」までの作家がノミネートされます……「人」でなくあえて「組」というのは、最近、tupera tuperaのように二人組の作家が世界的に増えているので。創設は1965年、前回は50周年記念展でした。今回は、次の半世紀の皮切りとして、審査員全体がぐっと若返りました。その中で私が3回目の古株だったこともあり、審査員長に選ばれてしまったのでしょう。国際コンクールとしてのBIBは、1967年に第1回が開催され、日本は最初から深く関わってきました。

ブラティスラヴァ世界絵本原画展と聞いて、ポーロニャ国際絵本原画展を思い浮かべる方も多そうですね。ポーロニャ展は、日本の絵本原画展の草分けでずっと開催されてきたので、日本には馴染みがありますね。関西では西宮市大谷記念美術館で開催されていますし、ブラティスラヴァよりも言いやすいです。実は、この最大級の絵本原画展が両方開催されているのは、日本だけなんです。しかもどちらも国内の4-5カ所の美術館に巡回されている。ふたつの展覧会を同じように

思ってしまうのも無理はないので、ちょっと比較整理してみます。ポーロニャ展は、国はイタリア。開始は1965年なので一緒です。ポーロニャは現地では毎春開催、BIBは奇数年の秋に開催されています。大きな違いは、ポーロニャは、世界最大の子どもの本の見本市、ポーロニャ・チルドレンズ・ブック・フェアという商取引の場の中に、展覧会が含まれていること。一方、BIBは非商業主義で、国立博物館など、市内の会場を借りて開催しています。審査員は、ポーロニャの場合はヨーロッパが中心。私はポーロニャの審査員も2010年にやっていますが、5人審査員がいるうち、原則ヨーロッパ以外から招かれるのはひとりだけ。だから、欧米を中心とした世界の最先端のトレンドが反映されやすい、というところがあると思います。BIBの方は広範囲で、南米やアフリカを含む、なるべく異なる大陸の10カ国前後から審査員が招かれます。全く違う背景や視点を持つ人たちが集まるので、ある意味、かなり一般読者に近い感覚で審査をしているような新鮮さを、私は感じています。もうひとつ、ポーロニャは個人で自由に応募できますが、BIBは国内審査がありますね。また、BIBは原画だけでなく絵本を合わせて応募するというのも、他の原画展と違うところです。つまり既出版され、各国で一定の評価を受けた作品が集まるわけです。各国の代表選手が集まるような、オリンピック的なところがあります。展示構成についてい

と、ポーロニャでは、70-80人くらいの入選作家の展覧会がそのまま日本に巡回するので、カタログ等も現地と基本同じ



ですけれど、BIBの場合は、展覧会の全点を持ってこようとすると3,000点ぐらいあるので、公立の美術館等では展示が不可能です。見る人も疲れてしまいますね。ですから、日本の学芸員たちといっしょにブラティスラヴァの現地を見て、受賞作を中心に、日本独自の展覧会を構成しています。

初期の日本との関わりというと、第1回のグランプリ受賞作品が、瀬川康男さんの『ふしぎなたけのこ』です。続けて、田島征三さんの『ちからたろう』が第2回の金のりんご賞をとられました。同じく第2回に出品された、赤羽末吉さんの『スーホの白い馬』。BIBでは惜しくも受賞されなかったのですが、国際審査員の間で高い評価を受け、その後、1980年に国際アンデルセン賞を日本人で初めてとられましたね。この写真は、第2回の審査風景で、左から2番目の眼鏡をかけているのがベッティーナ・ヒューリマンという絵本編集者で、有名な評論家。日本の絵本にも理解の深い人で、この時の審査員長だったと思います。その左に写っているのが、モーリス・センダックですね。

では、一気に2017年に飛びます。今、巡回している展示の元になっている背景です。まず、国内選考が行われます。JBBY(日本国際児童図書評議会)が窓口になって、審査を行います。皆さん、日本の絵本は年間、どれくらい新刊が出ているかご存知ですか?ざっくり計算すると、国内の新刊絵本が1,000冊弱だと、2年分の2,000冊近くが対象になります。その中から300冊ぐらいい絞込んで1カ所に集め、絵本による国内審査を行います。そこから15作家に絞り込みますから、日本の場合は、本当に狭き門ですね。決定後、作品を出版社や作家から借り受け、JBBYからスロヴァキアに送ります。これには、出版社や作家の多大な協力が背景にあります。例えば、あずみ虫さんの『わたしのこねこ』は、アルミを使った作品ですね。原画は現地に送る規定より少し大

きかったのですが、あずみ虫さんがなんと、自ら余白のアルミを切り落とされたものが搬入され、びっくりさせられました。

今回は東京から送り出す際に、各巡回館の担当学芸員が集まり、全員で作品を確認することができたのですが、作家ごとに大変違う絵本づくりをしていることがわかりました。これは、荒井良二さんの『きょうはそらにまるいつき』の原画です。荒井さんは、絵本をつくるとき、文から書かれるんですね。石黒亜矢子さんの『えとえとがっせん』については、きつと後で、編集を担当された筒井大介さんから話がうかがえるんじゃないかと思います。きくちちきさんの『ぱーおーぼのうた』。ちきさんは2013年に、金のりんご賞をとられていますけど、この本は全く違う変わった過程でつくられていますね。ぜひ展示室でご覧ください。奈良県立美術館の展示室は巡回館の中で一番広く、制作過程の展示がよく見られます。それから、この後で登壇されるこしだミカさんの『でんきのビリビリ』。これは、展示室に説明があったと思いますが、大きすぎて現地には送れなかったんですね。奈良県立美術館だけで特別出品されていて、見ることができる作品もあります。『はいくないきもの』の皆川明さんは、ミナ・ペルホネンのデザイナーさんですね。初めての絵本でした。額装されるとわかりにくいですが、アクリル板の表裏に描いてあるので、ガラス絵みたいなのがわかる展示を日本では工夫しています。村山純子さんの『さわめいろ』は、点字の絵本ですが、ブラティスラヴァに送る専用のケースをご自分でつくられ、ご本人が集荷の場に持参されたんです。でも特別なケースでは送れないので、記念に撮影をさせていただきました。最後が荒井真紀さんで、金のりんご賞をとられた『たんぼぼ』です。これらの原画が現地に送られ、各国から集まった作品が展示された会場で、国際審査が始まります。

国際審査の会場は、今回は国立自然史博物館でした。広い会場をぐるぐるぐるぐる何回もまわって、5次審査、6次審査と何度も見て絞り込んでいくんです。普段全然歩かない私も、1日で2万歩近く歩きました。国別にスロヴァキア語のアルファベット順で並んでいるから、公平に国の印象をインプットできます。今回はたとえば、韓国とイランが気合の入った、レベルの高い作品がきているなどという第一印象を持ちました。この2カ国の間に位置的に挟まれているのが日本でした。イギリスは全体的にレベルが高いですし、中国は近年の変化が目覚ましい……そういう国ごとの動きがBIBではよく見えるんです。日本は、約50カ国の中で、勢いという点では、3番、4番ぐらいのところかなという、個人的な感想を持ちつつ見ることになりました。

審査の時は、文字は読めなくても、絵の流れなど、絵本表現を確認するために、必要に応じて、絵本と原画をあわせて見ます。これは、日本の絵本が展示されたケースですね。日本は他の国と違って、縦書き、横書き、右開き、左開きがあり、日本語も読めない人ばかりなので、明らかに展示ケースも混乱していますね。

最終段階では、絞り込まれて50作品ぐらいになったところで、原画ではなく、絵本を集めて審査しました。絵は既に3日間見てインプットされているので、絵本を見ながら、それぞれが推薦する作品に付箋を貼っていき、さらに絞り込んでいきました。これはぎりぎりボーダー線上となった作品の写真です。そうして、グランプリなど受賞作品を決め、長い審査は終わりました。

ここからが発表の場で、国立オペラ劇場で授賞式が行われます。この晴れがましい場所でおまけのサプライズで、私はなぜかBIB功労賞をいただきました。受賞作は、まず子ども審査員賞という、子どもたちが選ぶ賞から発表になります。そして、だんだん上位に移り、最後にグ

ランプリが発表されるというかたちです。最初の審査の段階では、あまり気に留めなかった地味な絵が、だんだん気になって残ってきたりします。というのは、審査の間、何度も繰り返し見るうちに、最初のインパクトだけが強かったような絵は、もう見なくていいかなという気持ちになってくるんです。でも、地味だけど、何か良いなとぼんやり思っで見ているような絵は、5回見ても6回見ても、どんどん、見るほどに語りかけてくるようなところがあって。この審査の過程は、絵本の本質ともつながるのではないかと思うんです。絵本は、何度も繰り返し見るものだから。一発ギャグみたいなものではなくて、何度も見なくなる絵というのが、結局、今回の審査では最後に残りました。グランプリのルトウィヒ・フォルペーダの『鳥たち』は、見るほどに、細かいところが見えてくる作品なので、ぜひ展示室で、じっくり見てもらいたいなと思います。

こしだミカ氏 講演「わたしの絵本創作過程」

こんにちは。今日は、たくさんの方がいらしてくださいました。ありがとうございます。今回、『でんきのビリビリ』の絵本原画を展示していただいています。創作過程の話ということで、絵本をどうやって作っているか、お話ししたいと思います。隣にいらっしゃるのが、永松真規さんです。スライドの資料を作ってくださいたり、私のできないことを手伝っていただいています。真規さん、ありがとうございます。

『でんきのビリビリ』ができるまで

編集者の方、出版社の方と出会って、「一緒に絵本を作りましょう」となると、まず、「ラフを描いてください」と言われます。ラフというのは、紙に「だいたいこんな感じのことを伝えたいんです」というのを、簡単な絵と文で表したものです。ラフを編集の方にお渡しして、いろいろ相談をしていって、「それでは、本番の絵を描いてください」と言われるのが順番です。

もちろん、ラフを練ってから本番の絵という順番で描くこともあるのですが、ラフを描かずに、いきなり絵を先に描いてしまう時もあります。絵を描いてしまってから、何かお話にならないかなと考えて、ああでもない、こうでもないと思組み立てて、編集の方に「できました!」と笑顔で差し出したら、「うーん、ちょっと…」という反応で、そこから先に進めず、みたいなのもあります。

今回、『でんきのビリビリ』は、先に描いてしまった絵を、どういったら絵本にできるんやろかと、あれこれ試行錯誤してから、編集の方に見ていただきました。

きっかけは3・11です。あの日、私は大阪の自宅にいて、テレビで映像を見ました。その後、さまざまな情報がテレビ、ラジオ、インターネット、新聞に出ましたが、さて自分にできることは何かと考えました。あんな失い方があって、そこから時間が続いてゆく人たちがいてはる。その同じ時間に、自分には住む家がある。私は、あんまり遠くのことまで考えてこなかった人間です。自分と自分の好きな人たちが楽しく幸せに暮らせていけたらいいなあ、くらの感覚で生きてきたもんですから、原発のことについても、ちゃんと考えてきませんでした。それで、「自分が、いったいどれだけ電気を使っているのか、とにかく描いて

みよう」と思って、家の中にある電気を描くことから始めました。

描き始めたら「どんだけ使ってんの!?!」という程、電気を使ってきました。コーヒーメーカーとか、扇風機とか、いろんな電気製品を一つ一つ、左から見て、右から見て、スイッチとか見ていると、ほんまようできてる形ばかりでした。

使っていない電気製品も、いろいろひっぱり出しました。古いものは、かっこいい形してるんですね。「こういう形やったら、スイッチが入れやすいやろ」という具合に窪みになってたり、何回も使うところだけ強くなってたり、作った人の工夫も見つかります。「あんたら、えらいなあ」と、しゃべりかけながら描いていきました。

次に、屋外にある電気を探しました。外には、冷房の室外機や自動販売機もある。それでまず、自動販売機の前に椅子を置いて描くことにしました。

このシリーズは絹布に描きました。もともとは、紙に絵を描いていましたが、絵が大きくなって紙からはみ出してしまいうことも多くて、紙を足して描いたりもしていました。

ある時、巻いてある古い絹布をもらいました。古くなって使われないまま残っていた絹を母がもらってきてくれたものです。絹は、おかいこさんが作ったもの。何かに使えないかと考えて描くことにしました。絹布は、長いのがぎゅううと巻いてあって、長さを気にせずどこまでも描ける!と嬉しくなりました。

自動販売機を改めてじっくり見てみると、「あったかいスープと冷たいジュースと一緒に並んで、上からお金を入れたら下から出てくるって、すごいな」とわくわくしてきて、一気に描いていきました。布は縦にはずんずん描いていけるけれど、横巾は決まっいて巾以上は描けないということを忘れていました。自動販売機の横半分しか描けなかったなと思いながら、その日は日が暮れて帰りました。中に並んでるジュースがまだ描けていなかったので、夜に家で描いてたら、想像の翼が広がっていろんなジュースが出来上がりました。

今度は、ちょっと傾いている、長い年月を感じさせるような電信柱に目が留まりました。「あんた、描かしてもらうで」と声をかけて、下から描いていきました。

その電信柱の後ろには家があって、電信柱を描くと、同時にその家も描くことになりました。電信柱、ごみ箱、溝の蓋、家のドア、外壁、瓦…2日、3日通って描いてたら、無人だと思ってたその家の2階の窓がぶわって開いて、「お前、なんでわしの家、見とんねん」という感じで、家の人が見てきはったんです。その人は、きつと「変なおばちゃんが、うちの家をじっと見とるな」と思いながらも、しばらく我慢してくれてはったのでしょうか。私もどうしていいかわからず、口の中で「すみません」ともごもご言いながら、家と電信柱を交互に見て、とにかく上の方まで描かせてもらいました。

今まで何も考えずに、身の回りの電気を使ってきました。手を伸ばして、ポンとスイッチを押したらブーンと回って風を送ってくれる。シューと吸い込んでくれる。やってくれることが当たり前でした。その電気を追いかけていったら、だんだん、電化製品が人みたいになってきたんですね。電気を通す役目を果たしているモノたちから、電気のことを教えてもらった気がします。『でんきのビリビリ』を読ませてください。＊朗読(拍手)

ありがとうございます。広松さんのお話にあった通り、ブラティスラヴァに出展できる大きさは1m×1m。なのに、ものすごく長い絵を持ち込んでしまっ…。それも、私が運んだのではなくて、編集の小櫻

さんが、でかい重たい絵を、えっさほっさと運んでくださったのです。それが、出品作の集合場所で「大き過ぎる!」となって、結局、ブラティスラヴァには、規定サイズ内だった2枚が3枚かだけを送ってくださいました。その送れなかった絵を奈良の美術館で特別展示しようと、学芸員の飯島さんが一生懸命考えてくださいました。こんな理由で現地に行けなかった、はみだしてしまった絵として展示して下さってます。半笑いで見てもらえましたら嬉しいです。

『アリのさんぼ』ができるまで

私は絵本を作る前から、もともと絵を描いていました。それで、ラフより先に絵を描いてしまうことがあるのかなと思います。一方で、絵本を作りたいと思ってからも、長い間どうしたらいいのか、よくわかりませんでした。絵を描くのと、絵本を作ることに大きな川がありました。

2000年頃から、東京の千駄ヶ谷にあったギャラリー・エフで、個展をさせていただくようになって、絵本を作る人たちと、少しずつ出会っていきました。個展の期間中にラフを見てもらって、次の年に宿題を持っていくみたいな形で、ゆっくり、ゆっくり、絵本作りを始めました。最初の絵本『アリのさんぼ』も、絵を先に描いてしまった絵本です。

私は、人の話をちゃんと聞いてるつもりでいて、聞き間違えてしまったり、頼まれてもないことをやったり、そのくせ頼まれたことは忘れていたり、ということがよくあります。ある日、ギャラリー・エフで、「個展しましょう」と、さりげなく言うていただきました。大阪弁やったら「個展やろか、やろな、やるで、ええか」みたいな言い方になると思うのですが、東京では「こしださん、個展やる?」みたいな、さりげない言い方で、決まったとは理解していなかったのです。1ヶ月くらい前に、「DMどうする?」と電話がかかってきて、びっくりしました。1ヶ月は30日×24時間。「もう、好きなもん描こう!」と気持ちを切り替えて、好きな生きもの、気になる生きものをどんどん描いていきました。その間、何度も大阪市立中央図書館に行きました。相談のコーナーと一緒に探してもらったりしながら本を調べました。まずはアリの描こうと、自然科学のコーナーでアリだけが載ってる分厚い図鑑を見たり、子どもの本のコーナーで探したり。次は、ナマケモノを描きたくなって調べたり。自分なりに調べて描いたのですが、絵を見てくれはった人の中には「何も見ずに想像で描いてるみたい」と言うてくださる人もいて、「そう見えるのかな」と思ったりしました。＊『アリのさんぼ』の朗読(拍手)

ありがとうございます。そういうわけで、1ヶ月で描いて、絵の具が乾かないうちに持って行って、なんとか個展ができました。その時の絵をコピーして出版社に持ち込みました。「絵が暗いよ」と言われることもありました。その中で、架空社という、東京・練馬のマンションの一室で、前野さんという方が一人で熱い絵本を作ってる会社から出版されました。嬉しい1冊目でした。

あこがれのナマコ

それから何年か経って、大阪市立中央図書館のワークショップで駒崎さんという方と出会いました。駒崎さんは、架空社の『おー、うんこ』という、ぶたが食べ過ぎて、しんどくなって、うんこをしたらすっきりしたという絵本が好きで、「今度、絵本をいっぱい並べた中で、紙を丸めて茶色に塗ったうんこを積み上げた『おー、うんこ』の山を作るから、こしださんも遊びに来ませんか」と誘ってもらいました。それが「えほんのひろば」との出会いでした。そこに、ナマコのばあちゃんみたいな人が

いてはったんです。ナマコのばあちゃんって、これ、悪口じゃないですよ。

私、自分の理想は、ナマコのばあちゃんみたいになることです。ナマコって、入口と出口があって、砂を食べて、そこから栄養をとって、お尻から残った砂を出す。あんまり動かないし、自分からは何もしないし、なんだかよくわからない。でも水をきれいにしてくれる生きものです。

海に行くと、私はあまり泳げないので、海辺で遊んでいます。ある日、ナマコとカニを浜でとって、袋に収穫物として入れておきました。帰る時、リリースしようと袋の中を見たら、カニの周りをぐるりとナマコが取り巻いています。「ナマコがカニを食べようとしてる!」と、びっくりしました。後に、それは私の勘違いだと知るのですが、その時は急いでカニからナマコを剥がし、「ナマコのバカー!」と言いながら、ポーンと海にナマコを投げました。で、カニに「えらいめに遭うたなあ。ごめんな」と言うて、突堤に置いたんです。カニは横歩きで歩いていって、突堤の端からストンと海に落ちました。突堤の横面には、鉄のはしごが付いていて、カニが落ちる時、そのはしごにカーンと当たって、ポチャンと海に落ちました。「わわわ、カニ、ごめん!」「ナマコ、悪いやつ!」「カニ、ほんま、ごめん!」というような出来事がありました。結局、悪いのは全部、私なんですけど。

そんなことがあって、ただボテーとしてるだけに見えるけど、ナマコって実はすごいんちゃう?と思い、ナマコを調べ始めました。そしたら縁あって、ナマコの研究をしておられる先生に出会えたりして、より深くナマコのことを知るようになりました。ナマコ絵本の挿絵を描かせていただく機会もあり、ナマコのすごさを実感中です。

そんなこんなで、私も、おばあちゃんになったら、ナマコみたいになりたいと。ウエスト、ヒップ、全部同じサイズで、形もよくわかれへん。でも、ナマコが入口から何か入れたら出口から出すみたいに、私も何かを見たり感じたら出す。自分の管を通して描いたり作ったりして出す。頭で考えない。そういう人になりたいと思っています。今はまだ頭で考えているところがあって、考えても仕方のないことを気にしたりしているのですが。

えほんのひろば

話が長くなりましたが、私の理想とする、ナマコのばあちゃんみたいな人が、「えほんのひろば」におられました。加藤啓子さんという方です。「遊びに来ました」と言うのと、「こしださん、来たん」と笑いながら「こっち見て。こしださんの本を、うんこの本とか、いろんな虫とか、ちょっと匂いがしてくるような本のところに、一緒に置いてるから」と、顔中を笑顔にして言うてくれました。

周りを見渡すと、子どもが寝転んでゲラゲラ笑いながら本を読んでいたり、子ども同士で本の読み合いをしたりしています。自分には子どもがいないので、絵本が読まれている現場を、それまであまり知りませんでした。

すごい開放感がありました。ひろばでは、見て楽しめる本は、全部絵本。だから、料理の本も絵本。子どもと一緒に来ていた家族の人も、写真集を見たり、パズルの本を見たり。指で触る絵本も並んでいます。その中に、『アリのさんぼ』も置いてあって「うわ、ええんや」と思いました。

『でんきのビリビリ』を作る時、「電気の絵を描き始めたけど、こんな、絵本にしてもらえるかなあ」と、心のどこかで思っていました。そんな時、布に描いた絵をコピーして、あれこれ考えてみようと思いながら帰る道すがら、偶然、加藤啓子さんに会いました。私が手に抱えてた布を、加藤さんが「これ何?」と。「今、電気ばかり描いてるんです」と見てもらいました。この絵を本にする時、ちょっと説明がいるかなと

思い込んでいた私に、加藤さんは「子どもは絵を読んでる。そやから、いらん説明は、いらん。こしださんの絵を、子どもは見てるんやから、邪魔な言葉は要らんねんよ」とおっしゃいました。

何回も、ひろばにラフを持って行って、みんなに「どう思う?どう思う?」と聞いて、いろいろ自由に言ってもらいました。本ができた時、奥付けのところに、ひろばのことを書きたいと相談したら「会の名前なんて無いし、ええねん」とのことでしたが、その後、会の名前ができたとお聞きしたので、次に機会ある時には入れさせてほしいです。

こんな具合に、私は周りにいる人にすごく助けられて作ってます。作ってる最中は、家の前を通ってる小学生の子どもにも「どう思う?」と聞きたいくらいです。

『ねぬ』

他のとは、ちょっと違う感じで生まれた絵本もあるので紹介します。『ねぬ』という絵本です。25年ぐらい前に、デザイン事務所のお手伝いをする仕事をしていました。不器用なので、あまり役にも立てなくて、仕事しながら替え歌を口ずさんだりしていました。石原裕次郎さんの歌で、「おーいらはードーラマー ♪」というところを「おーいらはの一ねぬ ♪」と口から出てきて、「え?『のねぬ』ってだれ?」と考えていたら、「野良ねこ…、野良いぬ…、あ、野良ねぬ、を短くしたのが『のねぬ』やな」と。『『ねぬ』という、猫と犬のダブルのような生きものが、どっかで野良で生きてるのかな」とその時、思いました。その話の種みたいなのはずっと心にありましたが、「ねぬ」がどんな姿をしていて何がしたいのか、はっきりしないまま、時は過ぎました。絵本を何冊か作ってから、ふと『『ねぬ』を作るまで死んだらあかんわ』と思い、作り始めてから4つぐらい出版社を巡って行って、結局、架空社が「仕方ないなあ」という感じで出してくださいました。 *朗読『ねぬ』(拍手) そんなこんなで、絵本を作ってます。ありがとうございました。

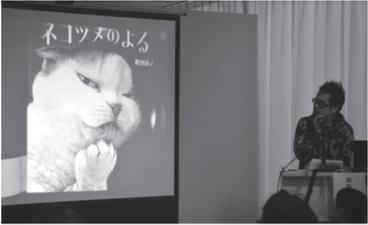
筒井 大介 氏

講 演 「これまでに見たことのない絵本を創るために」

こんにちは。フリーランスで絵本の編集をしている筒井大介です。今日、なんで呼ばれたかというのと、たぶん、ぼくが京都に住んでいるので、近いからというのと、今回ありがたいことに2冊の担当作、『ネコツメのよる』と『えとえとがっせん』という絵本が、出品されています。なので、お声がけいただいたのかな、と思っています。で、なんかすごい演題で。あんまりそんな感じの話にならなそうなので、先に謝っておきます。こしだミカさんの話、めっちゃおもしろかったですよね。ぼくの話は、そんなおもしろくないから、我慢して聞いてください。とはいえ、いつになく、真面目に絵本の話をしようと思っていて、レジュメもつくってきたんです。で、「これまでに見たことのない絵本を創るために」というよりは、出品されている2作を通じて、今の絵本というか、これからの絵本というか、そういう話になればいいかなあと思っています。

『ネコツメのよる』

なのでまず、『ネコツメのよる』。今回、奈良県立美術館でのメインビジュアルにももっていたいただいています。作者は町田尚子さんなんですけ



ど、『おばけにようぼう』という絵本で、前いた会社のイースト・プレス時代にご一緒させていただいています。で、町田尚子さんの絵本をいろいろ見てると、もう無理矢理、ねこをいっぱい出しているんですよ。ねこ好きというか、白木っていう、町田尚子さんが一緒に暮らしているねこなんですけど。白木をはじめとして、ねこがものすごく好きで、とにかく無理矢理、ねこを登場させていて。町田尚子さんの絵本を見る、それがひとつの楽しみなんですけど。「じゃあ、そんな、描きたいんやったら、ねこの絵本を描いたらいいんじゃないですか」っていう話を、冗談半分してたんですね。で、今日持ってきたんです、たぶん2回目か、3回目かに出してきたラフ。最初こーいう、ちっちゃいサムネイルみたいな感じで、考えるんですけど。『白木はね』、『ネコツメのよる』っていうタイトルが、まだついてない段階のやつですね。『白木はね』っていう仮題でした。ミロコマチコさんの『てつぞうはね』っていう絵本があるんですけど。当時あれが出た頃で、それにあやかって、『白木はね』ってタイトルで、ミロコマチコさんに描いてもらったら売れんちゃうか、みたいな。そんな話を、会うたびに冗談でしてたんですね、町田尚子さんとも。でも、考えてみたらほんまに『白木はね』は、ミロコマチコさんに怒られるけど、ねこの絵本をやったらええんちゃうかなあ、と思って、町田尚子さんに正式に、「ねこの絵本をお願いします」って依頼して始まったものです。で、ラフの段階でも、けっこう、完成に近い状況ですけど。『ネコツメのよる』じゃないんですね、これ。ねこが見上げるのは、ただ、三日月なんです、その時は。この後のラフで、『ネコツメのよる』になったのかな。だから、その最初のアイデアの段階では、ねこがぞろぞろ出かけていって、集会して、月見て帰ってくるっていう、もう超シンプルなものだったんですけど。まあ、このまんま絵本になっても、たぶん、いい絵本にはなったと思いますけど。おそらく、ここまで人気は出なかったかな、と。やっぱり、三日月じゃなくて、ネコツメっていう、ほんとに、実際絵本の中だと、ねこのつめのかたちをした月が浮かぶんですけど。それにしたおかげで、ちょっと想像力に広がりが出るというか。町田尚子さんの絵って、後でも話しますけど、すごいリアルなところが特徴的だと思うんですけど。リアルである分、ちょっとしたこのファンタジー感を出してあげると、そのリアルとファンタジーのバランスが、非常に良いのかなっていう。これで、ほんとに月だと、なんか、実際どこかであった話に思えてしまう。そうともらってもいいんですけど。町田尚子さんの、このリアルな絵を活かすには、こーいう、ほんの少しのファンタジーの演出っていうのは、効果的かなあ、と。結果的に、やって良かったなと思ってます。

で、さっきの『てつぞうはね』もそうですけど、ねこ絵本っていっぱいあって。で、その中で、どういいうものをつくるかっていうのは、課題としてあったんですけど。ねこ絵本って、基本的にどーいう風にしてまず考えるかっていうと、たぶん、ねこあるあるなんですな。ねこを飼ってる人が、ねこってそうそう、そーいうしぐさする。ねこってそうだよねという、共感するポイントを、いろんな角度から、抽出するっていう。例えば、おくはらゆめさんっていう作家に、『まんまるがかり』っていう絵本がありますけど、あれは、ねこのいろんな行動の中から、まんまるになって、どこでも寝ているっていうのを抽出してつくっています。ぼくが今年、『わたしのものよ』っていう、マルーさんっていうイラストレーターさんの絵本をつくりましたけれど、あれは、ねこがなんでもかんでも自分のものだっていう、箱にも絶対入るし、絵を描いたら上に乗ってくるし。なんでもかんでも、わたしのものよっていう、そーいう抽出の仕方をして、つくっている。なんか、ねこ絵本のつくり方の、基本的なことはそれで。

そして大切なのは、そこからどうやってイメージを広げていって

いう。だから、ねこを飼っていない人とか、ねこをそんなに好きじゃない人にも、普遍的に楽しんでもらえるアイデアっていうのが込められて、面白い絵本ができると思うんですけど。今回の絵本でいうと、ラフだと、ねこがまず、いろいろな場所で寝ているっていうところに、注目をしているわけですね。で、そこから、ねこの集会っていうのも、ねこのイメージはたくさんありますし。ねこが月を見るっていうのも、なんとなくそれは、ねこあるあるではないけど、イメージしやすいところなので。そこから先に、やっぱ、何が必要なのかっていうと、このネコツメっていうアイデアが出てきたところが、この絵本のオリジナリティーっていうか、いろいろねこの絵本がある中で、みんなが良いといってくれる要因のひとつかな、と思っています。ぼく、プロの絵本作家を目指す人のために、絵本の塾とかやってて。ねこの絵本描いてくる人、多いですけど。ねこあるあるの羅列だけに留まっている例がほとんどですね。

で、さっき話に出た、町田尚子さんの絵本の絵柄で印象的なのは、リアルな絵柄だっていう言い方をしましたけど。ぼく、2002年から絵本の編集をしているんですけど、たぶん当時、一昔前っていう言い方をしますけど、こーいう絵柄って、結構こわいって言われて。この表紙とかも、もしかしたら、ぼくが編集者になった頃であれば、場合によってはこわい絵でNGっていわれる。そーいう時代があったんですよ。こわいとか、あと、すごい強い絵。インパクトのある絵っていうのが、過剰に避けられたというか。別にそれは、受け手が避けたわけではなくて、出版社が主に、それを過剰に気にしすぎたのかもしれないんですけど。たぶん、その前だと、そーいうのをあんまり気にせず、出てたような気がするの。ぼくが入った頃っていうのは、そーいう雰囲気すごくあって。なんかちょっと窮屈だなっていう気持ちはありましたね。

例えば、軽部武宏さんっていう絵本作家がいます。軽部武宏さんも、今、『大接近!妖怪図鑑』とか、ぼくも『ながぐつポッチャーン』っていう絵本をつくってますけど、やっぱりこわい感じの絵柄で、今売れているんですけど。ぼくが編集者になった頃っていうのは、そっちの絵柄はほとんど子どもの本にはなっていないくて。小学館の『おひさま』に連載していた、かわいい絵柄のシリーズがあって、そっち方面での需要が軽部武宏さんも多かったように思います。だから、こわいっていうのが敬遠されていた中で、今むしろ、こわい絵、強い絵が求められている。だから、町田尚子さんも、その中の作家のひとつりだと思うんですけど。こわい絵、強い絵というのが、受け入れられている背景っていうのは、明らかに、3・11の震災が関係していると思っていて。だから、岩崎書店の「怪談えほん」シリーズとか、やっぱり震災以降の絵本だなあ、と思って見えます。あと、今回、金牌をとっているミロコマチコさんも、たぶん15、16年前なら、新人で、あーいう人が持ち込みで来たら、こわいですよ、その絵って言われた可能性はありますね。だから、震災以降の、代表的な作家がミロコマチコかかって思ってます。町田尚子さんは、震災前からキャリアがある人ですけど、震災以降にメジャー感が出てきた、急激に受け入れられたっていうのは、それが関係あると思うし。そーいう意味でも、町田尚子さんも、震災以降の作家かな、と思います。

それでね、今回の『ネコツメのよる』、内容的には、ぜんぜん震災は関係ないんですけど。この絵本の着想のもっとっていうのは、町田尚子さんが飯館村で見た風景なんですね。飯館村って、人が住めなくなって、犬、ねことか、ペットたちがおいてけぼりになってるんです。で、そこで、給餌活動、えさをあげにいく活動をしているボランティアの人たちがいて、町田尚子さんもたまについて行ってた。で、一緒に行った人が、空に浮かぶ三日月を見て、なんだかねこのつめみたいねって言ったこ

とがあったみたいで、それが印象に残ってた。だから、ねこの絵本やりましようって言われた時に、そこをベースにすれば、絵本はつくれるかもしれないって思ったらしいです。で、考えられた絵本が『ネコツメのよる』ですね。だから、うじゃうじゃねこがいて、みんなで見上げてるあの空は、そのものとしては別に描かれてないですけど、あのイメージのものとは、飯館村の空なんだと思います。というか、そうなんです。だから今の絵本って、ぜんぜん関係ないのも、もちろんたくさんありますけど、3・11から完全に逃れるっていうのは、難しいし、逃れるべきでもないと思いますけど、今の日本の絵本の特徴のひとつかな、と思っています。

で、そのリアルな絵柄って言いましたけど、そのリアルな絵柄を活かす。その活かし方が、町田尚子さんの現代的な作家性を特徴づけているひとつかな、と思ってまして。絵本、めくりましょうか。こういう場面でも、どこ見てもそうなんですけど、まずリアルな絵柄だっていうのは、すぐ気づくところですけど、その次に気づくのは、構図が非常に映像的。工夫された構図の連続、その連なりで、15場面を構成しています。で、リアルなタッチだけど、構図がずっと単調で、同じ距離からのショットを続けていると、あえてそういう演出っていうのは、もちろんあるとは思いますが、やっぱり単調になりますよね。せつかくリアルな、緻密な絵を描いてるけど、それが活かしきれないっていうのと、『ネコツメのよる』って、ものすごくシンプルな話なので、それを平板な画面構成でやってしまうと、たぶん、退屈な絵本になったと思います。そういう意味でも、この『ネコツメのよる』が、どんどんページをめくっていきたくさせる構成になっているっていうのは、町田尚子さんの、映像的な構図のつくり方が、大きい部分を占めているんじゃないかな、と思います。結構、日本の絵本だと珍しいかな、と思いますね。でも今、日本の作家でも、リアルな絵、緻密な絵っていうのを志向する人っていうのは増えていると思うので、こういうやり方っていうのは参考になるかな、と思います。海外の絵本だと、こういうすごい映像的なアプローチって時々あって、『かようびのよる』っていう絵本がありますが、あれなんかは、言葉がほとんどなくて、蓮の上にかえるが乗ってる、大群が飛んでいくっていうところを映像的に見せてますね。『かようびのよる』は、映像的な画面構成の中に、コマ割りみたいに、個々の画面にフォーカスさせた絵を入れたりしています。あれがね、すごいまいな、と思って。いつか自分が担当する絵本でもやってみたいと思ってます。だから『ネコツメのよる』は、数あるねこの絵本の中で、ちょっと他と違う、かつ、ちゃんと現代の絵本たらしめているのが、町田尚子さんの映像的なアプローチだな、と思ってます。

『えとえとがっせん』

2冊目の石黒亜矢子さんの『えとえとがっせん』も、町田尚子さんとは別のかたちでの絵本の現代性みたいな話に、どうしてもなってしまうんですけど、町田尚子さんは、リアルな絵柄を映像的なアプローチで処理して、絵本をつくるっていう人ですけど。石黒亜矢子さんは、なんていうのかな、伝統のアップデートというか。石黒さんも、さっき言った、震災以降の作家の系譜に、ぼくは入るんじゃないかなと思ってます。で、石黒亜矢子さんは、ページを開いて見ていただいたらわかりますけど、日本の絵巻物とか浮世絵から多大な影響を受けていて、大好きなんです。で、受けつつ、自分の作品には、子どもの頃から摂取してきたアニメとか漫画、特に少年漫画ですね。お兄さんがいて、その影響がかなり大きいみたいですけど。あとは、ホラー映画とかの、そういうカルチャーの要素を取り込んで、伝統的な表現にそういう現代性

を加えて。結果的に、そういう伝統的なものを現代版にアップデートして、絵本にしているっていう作家だと思えます。

で、今回のこの絵本は、十二類絵巻っていう絵巻を一応下敷きにしてるんです。その内容を大幅にアレンジするかたちで、絵本にしました。当時の依頼メールを検索してみたら、2014年8月って書いてました。その頃って、石黒亜矢子さんが急激に人気が出出した頃で。デビューはもうちょっと早いんですけど。たぶん、絵本頼んだら、順番待ちだろうなっていう頭があったので、そこに漠然と、絵本やりましようっていうんじゃあ、たぶんできないなあ、と。いつかやりましようね、みたいな感じで打ち合わせし続けて、10年みたいな人もいるんですけど。でも、具体的なネタを持って行って、で、それをやらないってなっても、こういう感じなら、例えばこんな風なことをやりたいとか、話が転がりやすいきっかけになるな、と思ったので、なんかないかなと思って、絵巻物をいろいろ調べてる中に十二類絵巻を見つけて、もうこれ、石黒亜矢子さん、ぴったりじゃないかって。それを提案しつつ、メールしたら、十二支っていうのは好きで、描いてみたいモチーフなんだと。そういう返事が来るともう、ガッツポーズですよ。

で、あくまで、その十二類絵巻は元ネタにするっていうだけで、好き放題やろうっていうのは、決めてました。というのもこれ、主人公、ためきですけど。元の話は、当時は、今でいうと漫画的なポジションではあったと思うんですけど、なんかね、ためきがかわいそうなんです。最終的に敗れ去って、出家してしまうんですね。それで、やっぱりね、十二支が絵巻の中でも偉そうにして、いけ好かないんですよ。で、ためきとか、名も無いけものたちが、そのまんま負けて終わっているのはやだなと思ったので。勝たせる方向にいくっていうのは、最初から決まってきました。

で、この絵本の特徴、いくつかあると思うんですが、たぶん一番は、石黒亜矢子さんの両極端が同居しているっていうことですね。石黒亜矢子さんって、ものすごい大迫力、時にはこわい、グロっていわれるような絵と、ゆるい漫画みたいな絵も描かれるんですね。そのプライベートっぽい漫画で、ご自分のご家族とか、ねことかのことを描いて、『てんまると家族絵日記』という、ちっちゃい本が出てるんですけど、ほんと、えんぴつのゆるいタッチで、描いてたりするんですね。そういう両極端を絵本に同居させたいな、と思って。これはかなり、最初からそうしようという話になりました。かつこいいだけじゃなくって、ちょっと情けなくて、笑えるような。だから、十二支は、かつこいい感じ、強そうに描いてもらって。これ、十二支と山のけものたちの戦いの話なんですけど、山のけものたちのやつらは、もう、ひたすらゆるい。もう、だめなやつら。最初、十二支が気に入らないって、決闘を申し込むんですけど、その待ち合わせの場所に早めに着いて、飲み会やってるんですね。こういう、思いつきゆるくふざけてもらう部分と、硬派なところというのを同居させると、石黒亜矢子さんの持ち味が、存分に発揮されるんじゃないかなと思って、そういう風にしてもらいました。だから、絵巻物をモチーフにしつつ、少年漫画とかを通過したような人なら、うれしくなるような要素が散りばめられながら、絵本ができてるっていう。今の人が、うまく昔のものをまねして描いたりすれば、自動的に表現がアップデートされるってわけじゃなくて、やっぱり自分の中を一回通して、自分だけが持っている要素を混じり合わせて、初めて昔の表現が現代的な表現になるんじゃないかな、と。ぼく、落語とかが好きで、よく古典落語もよく聞きますけど、やっぱり、今売れてる、面白い落語家っていうのは、自分の言葉で、自分の表現で、古典を語っているっていう人が多いので、そういう感じかな、と思ってます。で、元ネタ

の絵巻を、ほとんど無視してる。

でも、やっぱり、せつかく下敷きにしているので、エッセンスもなんとか残しておきたいなっていう気持ちは、もちろんあって。絵本読んでくれた人はお気づきかと思いますが、最初の方に、ラップで戦ってるシーンが出てくるんです。これは、なにをしているかという、ラップバトル、いわゆるフリースタイルっていうやつなんですけど。これ、なんでやっているかっていうと、単なる思いつきだけじゃなくて、オリジナルの絵巻では、十二支が歌合で戦っているんです。十二支同士が。で、その審判を最初、鹿がやるんですね。その話を聞きつけて、ためきが、ぼくにも審判をやらせてくださいよって、十二支のところへ行くんです。で、行ったらさんざんばかにされて、侮辱されて帰ってきて、そのうらみを晴らすために仲間を募って、十二支に戦いを挑むってのがオリジナルの話で。それ負けるんです、結局、オリジナルでは。だから、その歌合が絵巻の中でも結構重要なパートを占めるので。なんかやりたいな、と思った時に、歌合をやってもしかたないんですよ、今のエンターテインメントをつくろうとしているところで。急にそこだけ、歌合っていうのは、違う気がしたので。じゃあ、今、歌合的なニュアンスでなにができるかって時に、ラップで戦うっていう。ラフの途中で思いついて、石黒亜矢子さんにLINE送って、ラップやりませんかという。で、ラップって、声に出すとわかりますけどね。韻を踏んでるんですよ。だからこれ、ぼくが適当に考えて、石黒亜矢子さんにこんな感じで、ラップやったらいいんちゃいますかって送ったやつが、ほぼ採用されてます。ほんと、ラップも凝りたかったんです、もっと。十二支のやつらは、器用に韻を踏んで、山のけものものやつらは、雑っていうのをやりたかったんですけど、ぼくもrapperではないので、コントロールできずに。どっちかっていうと、山のけものものやつの方が、出来が良い感じになってます。いかに伝統的なモチーフに現代を持ち込むかということがポイントだと思うので。一番、石黒亜矢子さんの絵本の中でも、そういう要素が出ているかな、と思って、気に入っている絵本です。

見どころ、他にもいろいろありますが、やっぱりさっきも言いましたけど、今ね、ためきを負けさせる流れっていうのは、ちょっと無いなと思って。勝たせよう。で、勝たせる時に大事なのは、勝って、新しい十二支になりました、とか、そういうのだといやだな、と思ったので。この絵本、見どころいろいろあると思いますが、ぼくが好きなのは、まず、だめなやつらが、十二支っていう、権威ですよ。この絵本の中では、ものすごく権威だったことになって、すげえ偉そうなんです、十二支。やなやつら。この絵本では結果的に、権威とか権力を、コケにしているわけですよ。まず、それが良い。で、そのあと、十二支が、悪かったわ、みたいになって、ちょっと、新しい十二支、お前らやってくれやうってんですよ、最後。ためきは、お前らのあとがまなんて、まっぴらだ。ねこは、「えっそうなん」って言ってますけど。そうなんです。ためきはね、めんどくさいことが嫌いだから、絶対、そんなの引き受けない。だから、権威をコケにして、倒したけど、自分たちは権威にならないっていう、非常にすばらしい。って自分で言いますが、これはほんとに、すばらしい。それで、新しいグループ、ドンためきとワイルドアニマルズを立ち上げようっていつてますけど、なんにもやらないですよ。ただ、奥付の左側見るとドンためきとワイルドアニマルズって旗までつくってるけど、特になにもしてません。今って、非常にいやな世の中だな、とっていて。結果的にこういうバカバカしく楽しんでほしい絵本が、反権力的なメッセージを持ち得てしまうっていうのが、良いことじゃないことかもしれないけど。こういう世の中を、楽しく生きていくヒントというか、そういうものが実はあったりするのかな。それで、

こういうことっていうのは絵本をつくる人とか編集者が、おそらく向き合っていかなざるをえないことだな、と思って、今も絵本をいろいろつくってます。

対 談「絵本の現在・絵本の未来」 講 師：こしだミカ氏、筒井大介氏 聞き手：広松由希子氏

○絵本ができるまで

広松氏

前半のこしださんと筒井さんのお話、面白かったですね。対照的なお話で、今の絵本づくりの幅広さが感じられたように思います。

まず、こしださんのお話の中で、絵本をつくる前に絵がある。その間に、大きな川がある、と言われていましたね。その絵本になる前の「川」の部分について、お二人はどんな風に考えているでしょうか。

こしだ氏

絵を描いてきて、これから絵本を作りたいと思った時に、描いた絵の順番を考えてホッチキスで留めていったら、それで絵本になるかという、なにか違う。自分の好きな絵本、例えば木葉井悦子さんやスズキコージさんの絵本を見て「うわあ、すごい」と感じて、じゃあ自分はどこからここに入っていくといいのかと考えると、入口がなかなか見つかりませんでした。絵本には、何か決まったフォーマットのようなものがあるのかなと考えたり、どうしたらいいかわからない時間が結構ありました。その時、目の前に大きな川が流れてるように感じたんです。私は、やることがものすごく遅いので、40歳を超えてようやく1冊目の絵本が出ました。その後も、相変わらず遅いスピードで1冊ずつ、ああでもない、こうでもないで作っています。今も、その大きな川のきわの溝みたいなところにいる感じで、いつか、その川の水の一滴になれたらいいなと思っています。

広松氏

つくられていて、これで絵本になった！みたいな瞬間というのはあるんでしょうか。展示室にも何冊もダミーが展示されていて、『でんきのビリビリ』も、ああでもないこうでもないって考えられた跡がたくさんありますよね。絵本になる着地点をみつけるのは、たとえば編集者との関係が大きいですか？

こしだ氏

自分で絵を描いて、それを貼り付けてラフらしきものになった時は「できた！」って思い込んでいるのですが…それを編集の方に見ていただいて「これでは伝わりません」「うちでは、ちょっと」と言われた時は、自分には理由がわからないのです。「こういうところが、ちょっと」と、その理由を言ってくださる場合もあるし、言ってくださらない場合もあります。すぐに「やりましょう」と言ってくださる時もある、未だに、そのドアが開くか開かないか、自分でもよくわからないです。

広松氏

きっと筒井さんは、渡された絵本のダミーなりラフなりを見て、これは絵本になってない、とか、これで絵本になる、みたいな判断の瞬間が

えない傷を持っていて、生半可なものではそれに勝てないんじゃないかな、と。作家がどこまでそんなことを考えているか分からないし、受け手もそんなこと別に普段は考えていないと思うけど、多分そういうこともあるんじゃないかな、と。だからこそこういう絵本がたくさん出ているのかなという風にまずは思いますね。	
<p>こしだ氏</p> <p>だからこそ、笑いたいということもあると思いますね。だからこそ、面白い絵本が読みたいていうことも。</p>	
<p>広松氏</p> <p>そうですね。いろんな角度の、3・11後の絵本。ただ深刻になったということではなく、例えば、日常を見る目みたいなものが変わってきたり、問題意識が深まったり、うんとおかしい、腹の底から笑えるようなものを求めたり、自然を見つめる目が違ってきたり、いろんなパリエーションが広がって、新しい希望のかたちが生まれてきた感じがしています。3・11後ということを踏まえて、これからどんな風に絵本をつくりたいと思っていますか。</p>	
<p>筒井氏</p> <p>3・11も関係しているけど、確実に生きづらい世の中にはなっているので。まずは面白いものを、というのが第一なんですけど、これから生きる人たちの生きづらさみたいなのところには、着目せざるを得なくて、そこらへんに目配りをしながら、つくっていききたいという気持ちはありますね。</p>	
<p>こしだ氏</p> <p>家で、机の前で描いている時は、半分地下に潜ってるような気分で、今も大好きな時間です。でも、気がついたら外へ出て描いている時があります。『でんきのビリビリ』の時もそうでした。この間も、根室に村中李衣さんと一緒に伺って、3・11の後に、気仙沼から根室に引越してこられた船造りの人たちに出会いました。そんな風に、外で描くとか、人に出会うとかいうことが、以前より増えてきていると思います。それから、作る現場だけじゃなく、えほんのひろばに出会ったことも大きいです。好きな人々たちによる、好きな人々たちだけの場ではないところで絵本と出会う。おとなも子どもも、どちらもが伝え合える場で、新しい本と出会ったり、古い絵本と出会い直したり。そんなのも楽しいよと伝えたいです。</p>	
<p>広松氏</p> <p>「えほんのひろば」って、奈良県立美術館に出張して展開してくださったものを見ると、絵本の集まりとして、見たことのないものを感じますね。良書を厳選するといった固い雰囲気は全然なく、広がりが増え開放的で。それ自体が絵本の大きな力を伝えることになっているって感じていました。</p> <p>残り時間が少なくなってきましたが、他にお知らせなどありましたら、一言どうぞ。</p>	
<p>○これから出版される本について</p> <p>筒井氏</p> <p>この『やましたくんはしゃべらない』が出たてで。ガケ書房っていう本屋が京都にありましたが、山下さんっていう人の、自伝的エッセイで『ガケ書房の頃』っていうのがあって、その中に、幼稚園入園から小学校卒業まで9年間、人前では一言もしゃべらなかつたっていう話が出てくるんですね。それがすごくいい話なので、絵本にしましょうと言ってできた絵本。</p>	
<p>同じ岩崎書店から、「こんな子きらいかな？」っていうシリーズなんですけど、『ごろうのおみせ』っていう、これは生きづらさをかかえた子どもたちに着目したシリーズで、山下くんは実話を元にはしていますが、こっちはファンタジーです。小学生がある日突然小学校をやめて、近所の公園で店を開くっていう話。子どもだから売れるものなんかないんで、そこらにペンで丸とか三角とか描いたら、それがどんどん売れていくっていう話ですね。何言ってるかわかんないと思うんですけど、面白いんですよ。</p>	
<p>広松氏</p> <p>誰もごろうに勝とうなんて思わない。大人もごろうの弟子になりたい。友だちになって弟子になりたい…</p>	
<p>筒井氏</p> <p>そのコメントは作家の長嶋有さん。作者のごろうと親交があるので。絵はイラストレーターの死後くん。</p>	
<p>広松氏</p> <p>今までにない絵本という雰囲気は十分伝わってきます。こしださんはいかがでしょうか。</p>	
<p>こしだ氏</p> <p>手が遅いので、長い時間がかかっているのもあるのですが、今、出来上がりがつつあるのが『ナマコ天国』です。ナマコのことを研究されている本川達雄先生が書かれた科学絵本の挿絵を担当しています。2019年に偕成社から出る予定です。矢作春菜さんが編集してくださってます。ナマコは、勝手に、次の作品も考えています。「ナマコのばあちゃん」。まだ本になっていないのですが、いつか、ばあちゃんの本を出したいと思っています。</p> <p>それから、神戸の須磨海浜水族園に、2011年頃から通ってまして、バックヤードとか、巨大な水のタンクとか、生きものを世話している人とか、いろいろ見せてもらっています。それも形にしていければと思っています。他いろいろ。</p>	
<p>広松氏</p> <p>他いろいろ！楽しみです。ありがとうございます。</p> <p>駆け足でしたが、絵本の世界の広がり、これからへの期待みたいなものが膨らんだのではないかと思います。BIBという展覧会自体も、絵本の可能性を見つけられる場ではないかと。今回は特別に日本の作家たちの下絵や制作過程も展示していて、もっと想像を膨らませられる展示なので、ぜひ何度も足を運び、楽しんでいただけたらと思います。</p> <p>では座談会は、ひとまずこれで。どうもありがとうございました。</p>	
<p>●質疑応答</p> <p>司会</p> <p>一つ目は、他の国に比べて、日本の絵本や絵に特徴的なことがあれば教えてください、という質問です。</p>	
<p>広松氏</p> <p>一番大きいのは、先ほどのスライドでお見せしたように、縦書きと横書きが両方あることですね。めくるという意識をフルに活用することができます、意識さえあれば。</p> <p>あとは、本のフォーマットが割とかつちり決まっている。判型にしても、ページ数にしても、32ページまたは24ページ、基本は32ページ</p>	

<p>15見開き。本をまとめて見た時には、他の国と比べて、ちゃんと経済的な効率を考えた本づくりが圧倒的に多い。ハード面からの回答ですが。</p>	
<p>筒井氏</p> <p>そうですね、全部に当てはまる話じゃないし、変わってきていると思うんですけど、海外っていうのは、例えばヨーロッパだったり、アジアなんかもそうかな。非常にうまい、技術を全面的に押し出した絵っていうのが、やっぱり多いと思います。</p> <p>日本は、うまい人もいるけど、うまさを隠すわけじゃないけど、ミロコさんなんかもそうだし、長さんなんかもそうだと思いますけど、ザ・うまい絵じゃない絵っていうか、ある子どもが描いたような絵とか、遠近法全然関係ないです、みたいなとかは多いような気がするけど、だんだんそれも変わっている気ははやします。</p>	
<p>広松氏</p> <p>そうですね、韓国をはじめだんだん出てきている感じはしますけれど、日本には昔から稚拙美という、拙さを愛でる素敵文化がありますね。</p>	
<p>筒井氏</p> <p>オツとかね、そういうのも関係あるかもしれないですけど。</p>	
<p>司会</p> <p>では次は、皆さん3人に質問です。好きな本とその理由を教えてください。「最近」、「子どもの頃」など、特定にしてください結構です。1冊ずつお願いします。</p>	
<p>筒井氏</p> <p>これ結構実は一番難しいんですよ。子どもの頃、僕あんまり絵本を読んでないというか、読んでもらってたと思うけどほぼ記憶がないので、でもやっぱり一番影響を受けている長新太の絵本を。全部読んでない気もするけど、読んだやつ全部好きです。その中でもナンバーワンってよく思うのは、『あかいはなとしろいはな』っていう絵本が一番好きですね。ナンセンスと叙情が相まった、非常に美しい絵本です。</p>	
<p>こしだ氏</p> <p>2冊にしてもいいですか。</p>	
<p>司会</p> <p>もちろんです。</p>	
<p>こしだ氏</p> <p>長新太さんの、『ベタベタブンブンおおさわぎ』。この本は、幼い頃、持って歩いてました。多分かじっていたと思うんですけどちょっとかじった跡もある。引越しが多かったので、いろんな絵本が手元から無くなりましたが、その本は今もあります。</p> <p>大きくなってから好きになった本の一番は、木葉井悦子さんの『やまのかぜ』です。線、色の区別なく絵が描かれていて。命があって、生まれて楽しくて生きて、死ぬときは死ぬみたいなのが、同じ絵の中に連なってる感じ。木葉井悦子さんの絵本、全部好きです。</p>	
<p>広松氏</p> <p>一番初めに、とことん好きになったのは、『うさこちゃんとうみ』ですね。1歳の時に、その時の記憶はないんですけど、大きくなってから読み直したら、好きがこみあげて、ニマニマしてしまいます。</p>	

<p>司会</p> <p>こしだミカさんに質問。いつ頃から今のような絵を描かれますか？何か参考にされた作家さんはいらっしゃいますか？絵本をつくれるようになったきっかけはどのようなことでしょうか？</p>	
<p>こしだ氏</p> <p>小さい時はよくチラシの裏とかに描いてました。小学校へ行って、本読みが勉強になり、絵が図画工作になり。幼稚園ぐらいまでは家でパーって描いていたのが、「私もちゃんとした大人にならなあかん」と、どこかで思ったのか、だんだん描かなくなっていきました。20歳を超えた頃、また描き始めました。その時の周りの人の反応は、「あんたの絵は幼稚園みたいなお絵やなあ」という感じでした。</p> <p>それから、参考にした作家さんといえますか、大好きな絵描きさんは、いっぱいいます。ベン・シャーン、エゴン・シーレ、芦雪、若冲、北斎さん。私の勝手なイメージの中では、みんな大広間でお酒飲んではって、私はお茶汲みのバイトぐらいの感じで、周りの壁や襖や屏風にはいっぱい絵があって、「あんたも見ていきやー」と、大好きな絵描きの先輩たちが言うてくれてはるような気がしています。アルタミラの洞窟で絵を描いた人も、勝手に先輩だと思っています。</p>	
<p>司会</p> <p>では筒井さんに、絵本作家を目指すことにアドバイスなどありましたらお聞きしたいです。</p>	
<p>筒井氏</p> <p>難しいな。絵本作家を目指すって、絵本が好きだと思うんですけど、絵本だけを読んで絵本をつくっても絶対面白くないので、なるべくいろんなものを見ていろんな経験をして、もしかしたら遠回りする方がいずれ面白い絵本はつくれるかもしれないなっていう風に思います。何でそれが必要かっていうと、自分だけのものを見方を持ってほしいっていうことですね。絵本って気づくか気づかないかがかなり大きいと思っているので、同じものを見ても気づけば何かができるし、気づかなかつたらただの目の前の事象に終わるので、それにはいろんな経験、インプットが必要かなと思います。</p>	
<p>広松氏</p> <p>今の、すごくいいなあと思いました。</p>	
<p>筒井氏</p> <p>ありがとうございます。</p>	
<p>広松氏</p> <p>本当に絵本でやっていくとなったら、相当な覚悟がいりますね。自分を肥やすのが、やっぱりだいじ。こんなにいろんな作家のいろんなアプローチがあるから、こしださんが頭の中に描いている先輩方のように、自分にもらえるものを貪欲に吸収して。こしださんが言われたように、ここまで思ったらここで終わりや、と。でも、じゃあ今日は、ここまでにしとこっか、だけど、明日は新しいところから……って広げていったら、いかようにも広がるんじゃないかと。そんな作家がもっと出てきたらいいなって思います。</p>	
<p>司会</p> <p>それでは終わらせていただきます。みなさま、3人に盛大な拍手をお願いします。こしださん、筒井さん、広松さん、そしてご来場のみなさま、どうもありがとうございました。</p> <p style="text-align: right;">（記録：研究委員会）</p>	

絵本フォーラム「人生は回り舞台ー ささめやゆきの幻燈紙芝居」参観記

2019年3月2日(土)、稲村崎のアトリエgiogio factoryでおこなわれた絵本フォーラムに参加しました。「長野ヒデ子・ささめやゆき二人展」も同時開催され、会場は多くの人でにぎわっていました。開始15分前にすでに満席状態です。後でうかがったところによると、定員45名のところ、53名が参加していたとのこと。盛会でした。

まずは、ささめやさんの幻燈紙芝居「ノスタルジア」で幕開けです。ささめやさんの染み入るような語り声と、ほの明るい光に映し出される幻燈紙芝居のざらざらとした温かな質感、和紙に描かれた絵がゆるやかに巻き取られながら場面が展開していくにつれ、すっかり別空間に入り込んでいました。なつかしいような、物悲しいような、なんともいえない不思議な心地よい時間が広がりました。



続いて、ささめやさんのお話です。なぜ絵を描くようになったのか…。会社員だった20代のこと。毎日通勤時に見ていた景色を、突然描いてみたいと思い立ち、油絵の知識も何もないなか、2ヶ月間夢中で描き続けたそうです。でも、どうしても描きたいと思っていたものが描けず、もう描けない・やめようと、絵の具をぐちゃぐちゃに混ぜて部屋を出ようとしたとき、キャンパスには初めに自分が表現したいと思っていたものが立ち現れていたといいます。

ささめやさんの歩みは、けっして平坦なものではありませんでした。自分の意思とは関係なく、なりゆきで組合運動に関わったことで会社をやめざるをえなくなってしまったこと。けれども、そのことによって、パリに滞在して絵を描くことに集中できたこと。「目的としない偶然の出来事が未知の世界に導いてくれた。求めていた結果よりも、そのすぐそばに何かが潜んでいる。概念からはずれたところに、自分を超える何かがある」と、ささめやさんは言います。画家としての歩みも、新たな作品の創出も、偶然と必然によって紡がれ、織りなされているのだと…。ささめやさんは絵筆も端をもって、ゆっくり描くののだといいます。自身の力でコントロールしきれない不安定な絵筆は、偶然の形状や意図しない揺れる線を生み出すからです。自身と自身の力の及ばない部分ー神の領域が一体となったときに素晴らしい作品が生まれてくるのだと思われました。とても奥深いお話でした。このようなすてきなフォーラムを企画・運営して下さった企画委員の皆様にも感謝申し上げます。ありがとうございました。

(佐々木 由美子)

紀要編集委員会からのお知らせ

● 絵本学会紀要『絵本学』第22号投稿論文募集について

絵本学会紀要『絵本学』第22号への投稿論文を募集します。なお、下記投稿規程の他に執筆要項があります。原稿は、必ず執筆要項に従って作成してください。執筆要項は、絵本学会ウェブサイトからダウンロードすることができます。あるいは、絵本学会事務局にお問い合わせください。

絵本学会研究紀要『絵本学』投稿規程

◎投稿資格: 絵本学会会員および準会員 2019年8月31日までに会員資格を有していること。

◎内 容: 絵本に関する研究論文、研究ノート、論説、報告で、未発表のもの。

【研究論文】研究の視点や手法、理論展開及び結論に独創性や説得力が高く認められるもの

【研究ノート】研究の基礎データになる資料、あるいは理論構築の可能性が認められるもの

【論 説】学術的な論で、注目すべき研究・作品・作家・展覧会・活動を取り上げての評論など

【報 告】活動紹介や文献紹介など

● 掲載採択: 査読に基づき、編集委員が掲載の採否を決定する。必要に応じて編集委員の外に査読委員を依頼する場合があります。採否判定の過程・理由は開示しない。ただし、投稿者は、結果について説明を求められることができる。この場合、編集委員会は申し出の内容を精査の上、適正範囲内で回答する。

● 執筆要項: 執筆は別に定める執筆要項に従うこと。

● 投稿締切: 2019年9月30日(必着)

● 採択通知: 2019年12月15日までに投稿者へ通知する。

● 刊 行: 2019年度内

● 原稿送付先: 絵本学会事務局(郵送とする。FAX、電子メールなどによる送付は不可)

<文章量についての注意>

絵本学会紀要『絵本学』へ投稿を希望される方は、執筆要項をよく読んで、原稿を作成して下さい。特に、文章量にはご注意ください。

絵本学会紀要『絵本学』は第1号以来、同じ書式で作成しています。現在の紀要のページ割では、註・引用文献・参考文献を含め、研究論文は8ページ、研究ノートは6ページ、論説と報告は4ページを原則とします。このうち、はじめの左半ページは、表題、執筆者名、専門分野、和文・英文抄録等の記載に使用します。本文は右半ページからはじめます。

研究委員会からのお知らせ

●2019年度研究助成応募申請要項について

2019年度研究助成についてお知らせいたします。学会員皆様の応募をお待ちしております。応募申請の手順等は以下の通りです。

① 応募資格

2019年度年会費納入済みの会員であること。プロジェクト研究の場合は、全員が会員とする。

② 申請書

「絵本学会2019年度研究助成申請書」に必要事項を記入の上、下記の方法のいずれかで申請書の提出をお願いします。申請書は同封されています。ご確認ください。また、学会のホームページにアクセスし「2019年度研究助成応募申請要項」から書式のダウンロードができます。さらに会員向け学会メールニュースでもお知らせする予定です。

③ 募集の件数および助成金額

合計3件(1件につき5万円の助成)

④ 応募の締め切り

2019年6月30日(日)消印有効、メールの場合は6月30日必着

⑤ 結果の通知

2019年7月末日までに研究委員会より研究代表者宛に通知します。

⑥ 研究成果報告書の提出について

研究助成の採択を得た場合、2020年3月末日までに研究成果の報告書をA4サイズ1枚程度(書式、字数は自由)にまとめて、研究委員会宛に提出してください。なお、研究成果は、絵本学会大会や『絵本学』での公開を望みます。

【提出方法】

メールの場合: 絵本学会事務局 office@ehongakkai.com

*メールタイトルに「研究助成申込」と記載のこと。

郵送の場合: 〒448-0852 愛知県刈谷市住吉町4-5

刈谷市美術館内 絵本学会事務局

*上記事務局宛に郵送の場合は締切厳守、封書の表に「研究助成申込書類在中」と朱書きのこと。また事前にメールにて郵送の旨の連絡をお願いします。



絵本学会 Who's who

今号は、刈谷市美術館の館長代理を務める傍ら、絵本学会の煩雑な事務を一手に担って下さっている松本育子事務局長について、絵本評論家の広松由希子さんが紹介してくれました。

松本育子事務局長はこんな人

広松 由希子

松本育子さんには、裏がない。どこからどう眺めても表である。それは、初めて会ったときから変わらない。

初対面は、かれこれ四半世紀ほど前のこと。刈谷市美術館の学芸員だった彼女は、私が当時勤めていたひろ美術館に、作品返却に来られたのだと記憶している。ピシッとプレスのきいた折り目正しきで、前のめりなほどテキパキと作業を進め、若そうなのに(実際お互い若かったのに!)最上級の敬語で話された。その態度は、刈谷市美術館の館長代理となられ、すっかり親しくなった今でもそれほど変わらない。

思いがけず深い仲になったのは、それから2、3年後のこと。歴史に残る(いろんな意味で)瀬川康男展の共同調査がきっかけだった。故・瀬川康男さんにアマゾンと恐れられた私たちは、血気盛んなアラサー四人組であった。隊長のマツキヨ(現某美術館副館長)がこの軍に属するためには「松」か「希」か、あるいはその両方が氏名に含まれなくてはならないと、後付けの妙な鉄則をつくり、我々はそれに従った。アマゾンというかイナゴというか、思い返すと忍びない。閑静な上田の御宅とアトリエを度々急襲しては、眠っている作品を揺さぶり起こし、あらいざらい調べ上げた。育子さんの必殺技は「シラミツツシ」で、見逃すということはできないのだ。それは、徹頭徹尾変わらない。後の宇野亞喜良展、井上洋介展、子供之友展等々でも磨き上げた技で、圧巻の研究展示を見せつけてくれた。

さて、怒涛の作業の後は、ビールである。育子さんは、酒が強い。他の面子も決して弱くはなかったが、私たちが缶ビールを半本飲む間に、彼女は2本空けていた。それは、今では拍車がかかり、酒豪の名をほしいままにしている。

料理はあんまり強くない。包丁を持たせると危険なので、瀬川さんはいつも「育子は座っている」と、自ら台所に立ったという。その辺は、今では少し変わったようだが、強いことはめつぼう強く、弱いことはかなり弱いの、育子さんである。

漢である。「やります」と言ったら、やるのである。損得ではない。学芸員としての激務、自治体の管理職に加え、絵本学会事務局長。ものすごく損な役回りに自分を追い込んだ挙句、「1ミリでも楽しかったらいんですよね」と自分を慰める、健康な人である。

美容オタクである。人のシワについても容赦なくチェックし、親身になって心配してくれる。

やることはとことんやる。やらないことは徹底してやらない。好きになったら、ひたすら心酔、溺愛する。駆け引きなど知らない。人の裏を疑わない。だから、時々泣いてしょげるが、酒を浴びて忘れる。

育子さんは、育子さんである。ひたすらオモテシがなく、どこを切っても育子が出てくる。私はそんな彼女といると一種の安らぎを覚え、全幅の信頼を寄せている。

新入会員の自己紹介コーナー

岡保 由美子

(大和大学保健医療学部看護学科)

はじめまして、おかやすゆみこと申します。大阪府内の大学に勤務し、専門は小児看護学です。看護師を志す学生たちと日々奮闘しております。小児病棟に勤務していることから、病気の子どもたちと一緒に絵本に触れてきました。大学の授業の中では、授業内容に関連した絵本を取り入れています。絵本には、教員の語りだけでは伝えられない、子どもの存在そのものの尊さや、子どものもつ素晴らしい内面世界、親が子を想う無償の愛までを絵や文字から伝えてくれます。気がつけば、授業の導入やまとめの際にも、絵本を活用するようになっていました。今後も絵本を活用した授業研究を進めながら、病気の子どもたちの権利が保障され、病気に意味を見だし、前向きに過ごしていけるようなプレパレーション絵本の研究にも積極的に取り組みたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

小野 則子

はじめまして。私は愛知県豊田市で学校日本語指導員をしながら、外国にルーツを持つ子どもと親の読書サポート活動をしております。2016年に南山大学大学院人間文化研究科教育ファシリテーション専攻課程で、外国人のための日本語教室における、ボランティアの学びについて修士論文を書きました。絵本とは全く関係のないテーマです。私にとっての絵本への興味は、外国にルーツを持つ子どもをサポートする現場で絵本の必要性を感じ、3年前に「おむすびころりん愛知」という団体を立ち上げたことに始まります。現場での読み聞かせの実践で、自分が絵本に対する知識がないことに大きな危惧を抱き、第5期絵本専門士養成講座を受講しました。そこで絵本学会のことを知り、多言語の環境で育つ子どもに絵本をどう手渡すかに関して、これからも学び続けるため入会いたしました。これからどんな学びがあるのか、ワクワクしております。どうぞよろしくお願いいたします。

小野寺 美奈

はじめまして。この度絵本学会に入会させていただきました、東京家政大学の小野寺美奈と申します。専門は国際理解教育で、普段は音楽を通じた文化理解の教育論について研究しています。また職場では、保育士や幼稚園教諭、特別支援学校教諭の育成に携わっております。絵本は幼い頃からおもちゃやゲームよりも大好きで、もともと個人的に興味関心が高かったのですが、近年日本国際理解教育学会の特定課題研究「難民問題から国際理解教育を問う」プロジェクトの絵本チームに所属したことで、改めて研究対象として絵本と出会い直すことになりました。様々な国で出版された難民をテーマとした絵本を収集・分析し、それをを用いた教育実践を模索しています。ことばと絵の総合芸術としての絵本、想像力の遊び場としての絵本の魅力や奥深さを知るにつれ、ますます関心は膨らむばかりです。どうぞよろしくお願いいたします。

高塚 千春

この度、絵本学会に入会しました高塚千春と申します。図書館で偶然手に取った「BOOK END」を読み、この学会を知りました。現在読み聞かせボランティア団体に所属し、小学校や幼稚園、子育て支援センターで絵本を読んでいます。絵本をいろいろな角度から読み解いた研究がおもしろく、とても勉強になります。どうぞよろしくお願いいたします。

塚本 やすし

1965年東京生まれ。絵本作家。児童文学作家。公益社団法人日本文藝家協会 会員。主な絵本に『しんできた』(谷川俊太郎・詩/佼成出版社)第25回けんぶち絵本の里大賞のびばからす賞、『やきざかなののろい』(ポプラ社)第6回リプロ絵本大賞・大賞。第9回ようちえん絵本大賞・大賞。『このすしなあに』『とうめいになげんのしょくじ』(ポプラ社)、『そのこ』(谷川俊太郎・詩/晶文社)、『せんそう』昭和20年3月10日東京大空襲のこと』(塚本千恵子・文/東京書籍)、『戦争と平和を見つめる絵本 わたしの「やめて」』(自由と平和のための京大有志の会・作/朝日新聞出版)第7回ようちえん絵本大賞・大賞、その他多数。絵本作家として絵本の読み聞かせイベントとライブペインティングを毎年、日本全国の図書館やイベント会場や書店等で活動する。

辻本 美津紀

はじめまして、辻本美津紀と申します。子どもの頃から何となく、ごく自然に絵本が好きで、大人となり子育てをするようになってからは、地域の場や学校での読み聞かせや、諸々の講演や勉強会へ参加をするようになり絵本に対する興味がより一層増してきました。現在は自らのブログにて鑑賞・分析を綴っております。

もっと深くもっと自由に絵本を愉しんでゆけるようになれば、という思いから今回入会をさせて頂きました。新しい出会いや発見を楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

ブログ：Tabula Rasa(タブラ・ラサ：mitsuki)

(<http://rasa-tabula.jugem.jp/>)

當銘 美菜

(目白大学子ども学科助教)

ご縁あって、この度、絵本学会に入会いたしました、當銘美菜と申します。これまであまり絵本とかかわる機会がなかったのですが、柳田邦男先生の「大人こそ絵本を」という声に励まされながら、書店や図書館などの絵本コーナーを訪れることが少しずつ習慣となってきました。本棚に新たに加わった絵本たちは、背丈も色彩もさまざまで、どんな基準を設けても順序をつけることができないほど、自由で気ままな雰囲気です。飛躍しすぎるかもしれませんが、絵本を置いてできた凸凹の隙間と色づいた一角を見るたびに、私たちの生きる社会もこうであってほしいと感じます。ネガティブなものだと捉えられがちな弱さや不器用さ、あるいは違いというものを、絵本はありのままに受け入れる

力があります。さまざまな背景を持つ他者を理解し、自分自身を見つめ直すことが求められる今だからこそ、絵本に大きな可能性を感じています。皆さま、どうぞよろしくお願いいたします。

山西 優二

山西優二と申します。過去30数年にわたり、開発教育や国際理解教育の領域で、NGO・地域・学校などの場での実践そして研究に携わってきています。いま早稲田大学に所属していますが、国際教育論・共生社会論といったゼミ・講義を担当しています。そんなことをする中、ゼミの卒業生たちとは協働で、過去9年間でオリジナル物語絵本を3冊、自費出版してきました。また難民問題がクローズアップされる中、絵本からの難民問題へのアプローチにも関心を持っています。

学会に新しく参加することって何かワクワクします。どうぞよろしくお願いいたします。

*「新入会員の自己紹介コーナー」では、新たに入会なさった会員の皆様すべてに執筆のご依頼をさせていただいております。万が一、ご依頼のメール等が届いていない場合は、学会事務局までご連絡くださるようお願い申し上げます。



出版のお知らせ

学会事務局に届いた出版情報をお知らせいたします。

・今田 由香 著

『トミ・ウンゲラーと絵本 その人生と作品』
(玉川大学出版、2018年8月)

ウンゲラーの人生と作品を実証的に読み解きます。図版や資料も豊富です。



・中川 素子 著、スタシス・エイドリゲーヴィチユス 絵
『スタシスさんのスポーツ仮面』
(岩崎書店、2018年12月)

スポーツを顔で表現したら?!

面白くて、不思議で斬新な絵本です。



・中川 素子 著

『スポーツするえほん』
(岩波書店、2019年1月)

スポーツの楽しさを描いた絵本60冊を紹介。
これまでにないユニークなブックリストです。



・正置 友子 著

『メルロ＝ポンティと〈子どもと絵本〉の現象学』
(風間書房、2018年10月)

子どもと絵本の関係性を現象学から読み解きます。



絵本学会理事会報告

◎2018年度第4回絵本学会理事会 議事録

日 時：2018年12月9日(日)13:30～17:30

会 場：日本女子大学(新泉山館)4階 児童学科会議室

出 席：澤田精一(会長) 松本育子(事務局長) 生田美秋

今田由香 甲木善久 佐々木由美子 鈴木穂波

長野麻子 藤本朝巳 丸尾美保 甲斐聖子(事務局補助)

◆ 報告事項

1 会長より

澤田会長より第4回理事会にあたり挨拶がなされた。

2 前回2018年度第3回絵本学会理事会議事録の確認資料に基づき第3回絵本学会理事会議事録の確認がなされ承認された。

3 各委員会報告

① 企画委員会

今田理事(委員長)より、資料に基づき以下の事柄について報告がなされた。

・アンケートと意見交換会の会員への報告を絵本学会NEWS第62号に掲載した。

・2018年度の「絵本フォーラム」について以下の通り決定した。

タイトル：「人生は回り舞台—ささめやゆきの幻燈紙芝居」

ゲスト：ささめや ゆき氏

日 時：2019年3月2日(土)14時～16時 定員：45名

内容に関しては、今回窓口となっている長野理事より詳細の説明があった。

広報計画についても、今田理事から説明がなされ、会員へのチラシの送付および、絵本学会ホームページ・フェイスブックでの掲載依頼もあわせて確認がなされた。

② 紀要編集委員会

鈴木理事(委員長)より、資料に基づき以下の事柄について報告がなされた。

・絵本学会紀要『絵本学』第21号の応募数が12件あり、数が多く内容が多岐にわたることから、紀要編集委員4名に加え、学会員5名と学会員以外1名の合計10名で査読を行った。11月23日に査読委員会で検討された結果、4件について(内1件は研究ノート)、訂正・再提出とし、再査読を行うこととなった。再提出の期日は1月7日(月)とし、再査読をして採否を決定する。

・目録の作成に関しては、石井光恵氏、森寛氏を中心に進行している。

・投稿規程と執筆要項の見直しについては、他学会の例などを調べ引き続き検討を行っている。

・連続性のある論文についても議論にアがり検討がされている旨話された。

③ 機関誌編集委員会

特になし

④ 研究委員会

丸尾理事(委員長)より、資料に基づき以下の事柄について報告がなされた。

11月18日に行われた絵本セミナー「BIBと絵本制作の舞台裏」の参

加人数が110名(内絵本学会会員19名)で、盛況のもとに終了したことが報告され、アンケートについても内容の紹介がされた。

⑤ 広報委員会

佐々木理事(委員長)より、以下の事柄について報告がなされた。

・絵本学会NEWS第62号が無事に発行され、次号については3月発行予定で進行している。

・学会ホームページについては、新たなシステムに作り直すことも含めて検討がなされている。

⑥ 特別委員会

生田理事(委員長)より、以下の事柄について報告がなされた。

・第3回日本絵本研究賞第一次選考会が10月20日(日)に行われ、応募者4名で、論文5編(自薦3編、他薦2編)があり、一次選考の結果論文4編(3人)を本選考に送ることを決定し、1編は内容不十分として、見送ることとした。

・選考会後に、日本絵本研究賞特別委員会を開催し、日本絵本研究賞の次年度以降の開催について話し合いの場が持たれた。委員会としては、隔年開催を理事会に提案するという事となった。

・今後のスケジュールとして、第3回日本絵本研究賞選考委員会(最終選考)は2019年2月1日(金)に、表彰式は、2019年3月27日(水)毎日新聞社で開催予定である。

4 事務局より

・第1回日本絵本研究賞の賞金について 陶山前事務局長、本庄前特別委員長に確認し、第1回日本絵本研究賞受賞者の村中李衣氏への賞金5万円が未払い。澤田会長と相談し、松本猛前会長、陶山前事務局長連名での謝罪文を作成してもらい、2月1日(金)の最終選考会の際に澤田会長に賞金とともに手渡しすることが確認された。

・年内の発送作業について 12月20日(木)に封入・発送作業を予定している旨報告があった。今回の発送では、学会NEWS第62号のほか、絵本フォーラムチラシ、入会案内チラシ、関係チラシなどを会員に送付予定である。

5 「フォーラム 子どもたちの未来のために」について

澤田会長より、以下の日程でフォーラムを開催した旨伝達がなされた。

① タイトル：連続講座 講演会「新聞は権力とどう戦うか？」

講演者：望月衣塑子

日 時：2018年11月27日(火)19:00～21:00

入場料：1,000円(各回) 定員150名・先着順

(専修大学学生・教職員は無料)

場 所：専修大学5号館7階571教室

(千代田区神田神保町3-8)

② タイトル：連続講座 講演会「TVキャスターが見た日本の政治」

講演者：金平茂紀

日 時：2018年12月4日(火)19:00～21:00

入場料：1,000円(各回) 定員150名・先着順

(専修大学学生・教職員は無料)

場 所：専修大学5号館7階571教室

(千代田区神田神保町3-8)

③ 詳細は未定だが、2019年3月18日(月)にもフォーラムを予定している。

6 その他

特になし

◆ 審議事項

1 入退会者について(9月29日～12月8日)

以下の新入会者8名および退会者3名が承認された。

入会者：渡邊晶 小野則子 塚本やすし 松田純子

杉本真理子 佐野友恵 高塚千春 中村祥子

退会者なし

新入会者の身分や所属・研究内容など記載の無い方について問い合わせをし、出来る範囲で記入いただくようお願いすることとなった。現状では様々な方が集う団体であるが、今後学術団体への登録を目指すのであれば、会員の情報もとりまとめる必要があり、どうい団体を目指すべきであるのか引き続き継続して審議していくことが確認された。

2 事務局より

① 後援依頼があり、慣例にならない以下3件の事業後援をおこなうこととなった。

・軽井沢絵本の森美術館「絵本に暮らす動物たち」
会 期：2019年3月1日(金)～6月24日(日)

・公益財団法人いわさきちひろ記念事業団

「ちひろ美術館×文化服装学院共同企画 ちひろ子どもスタイル
いわさきちひろの絵から飛び出したキッズ・ファッション(仮)」
会 期：2019年3月1日(金)～5月6日(月・祝)

・日本女子大学特別重点化資金企画講演会「スージー・リー新作絵本『せん』を語る」

開催日：2019年2月10日(日)10:00～12:00

② 事業後援を行った以下2件より会期終了の報告があった。

・軽井沢絵本の森美術館「シンデレラ&プリンセス絵本展」

・公益財団法人いわさきちひろ記念事業団

「いわさきちひろ生誕100年 Life展 あそぶ plapla」

③ 入会資格の確認

前回理事会において、入会資格について話され以下のように決定したが、松本事務局長より、第22回絵本学会大会における研究・作品発表要件を満たす入会資格は、今年度は2019年1月20日の時点で入会手続きが終了している方とすることが提案され了承された。次年度以降に関しては、以下の通り統一していくことが再度確認された。(総会で提案・周知)

引用：入会資格について意見交換がなされた結果、入会資格については理事会及びメール審議などを経て事務局が随時受け付けるが、大会発表や研究助成、紀要投稿などの応募資格については、前年度末までに会員資格を保有する者とし、次年度より統一することが承認された。

3 第22回絵本学会大会について

第22回絵本学会大会校である辻政博氏より、計画案に基づき説明がなされた。

- ・参加費は会員1,800円 一般は1日あたり1,000円 帝京大学教職員及び学生は無料とする。
- ・交流会参加費は4,000円(1時間半程度を予定)
- ・研究発表希望者が32名を超えた場合、次回理事会で審議することとする。
- ・クロークは作るが、貴重品は持ち歩いてもらい管理は自己責任とする。
- ・作品発表展示準備は原則大会1日目午前中に行う。
- ・封入作業など前日準備は15時より実行委員会を中心に行う。

- ・封筒は絵本学会のものを300部辻氏宛に事務局より送ることとなった。
- ・名札ホルダーは使い捨てのものを会場校が用意する。
- ・書籍販売・サイン会の有無などは今後検討。
- ・学生アルバイトは20名くらいを見込んでいる。
- ・プログラムへの広告募集を検討しており、了承された。
- ・研究発表の座組み案は、生田理事が作成する。
- ・総会は30分とする。

4 各委員会より

① 企画委員会

特になし

② 紀要編集委員会

特になし

③ 機関誌編集委員会

藤本理事(委員長)より、資料に基づいてBOOKEND出版に関して、理事会として懸念のあった経営状況などについて、調査を行った旨、説明がなされた。藤本理事としては、BOOKEND2019に関しては、判型も考慮するなど予算も減らして、朔北社で刊行したい旨、提案され了承された。また、BOOKEND出版に関して、スケジュールが遅延していることから、刊行も2ヶ月程度の遅れが見込まれることも合わせて伝えられた。BOOKEND2020以降は、文伸(ぶんしん)ほか新たな出版社に作成を依頼することが提案され、了承された。

・朔北社から売上金に関してはすでに支払い済みであることが報告された。

・松本事務局長より、総会以降のBOOKENDの売り上げに関してどのように把握したらよいか質問があり、2019年3月31日付けで、朔北社より売り部数の報告がなされる旨説明があった。

・朔北社の経営状況について心配されているが、朔北社の宮本氏に確認を取り、今後の出版ラインアップや、事務所も存在することなどが説明された。

・BOOKENDの内容について書籍として魅力のある内容にと澤田会長より要望が伝えられた。

・BOOKENDとNEWSの内容が重複しないように内容の棲み分けについても確認された。

④ 研究委員会

特になし

⑤ 広報委員会

学会ホームページに会員のリンク希望があり、話し合われた結果、会員ページにリンクを張ることとなった。

・今井秀司氏 ピースライフジャパン

このことに伴い、会員ページの内容や必要性について話し合わせ、継続審議となった。

⑥ 特別委員会

日本絵本研究賞の次年度以降の開催について話し合われた結果、2019年度に第4回研究募集を行うことは、見送りとなった。

5 日本学術会議協力学術研究団体への登録について

引き続き検討することとなった。

6 第23回絵本学会大会(2020年度)および以後の大会開催について第23回絵本学会大会について資料に基づき藤本理事から説明があったが、開催地決定というところまでは行かず、継続審議となった。

第24回、第25回の候補地に関しても、理事が積極的に動いて行か

編集後記

なければならぬことが確認された。

7 絵本学会20周年記念事業について

出版事業については、すでに20周年を過ぎていることもあり、新たな書籍を発行するのではなく、20年史で代行することが了承された。

8 次回理事会開催日程について

第5回理事会は、第22回絵本学会大会の研究・作品発表申込期日である2月24日(日)後の3月3日(日)となった。

- ・多くの人に支えられて、学会NEWSを今号も無事に発行することができました。今回も新入会員の皆さんの自己紹介がたくさん掲載されています。学会NEWSが会員の皆様をつなぐ橋渡しの役割を果たせると嬉しいです。今回、かわいいイラストを描いてくださったのは、井之口真央さんです。ご執筆くださった皆様、本当にありがとうございました。

(佐々木 由美子)

- ・絵本学会大会が近づいてまいりました。ホテルの予約をお急ぎください。第3回日本絵本研究賞、同奨励賞は共に該当作なしという残念な結果に終わりました。応募も少なく、賞のあり方について検討が迫られています。会員の皆様の声に耳を傾けながら、改善策を模索してまいります。

(生田 美秋)

- ・先の62号から新入会員の自己紹介のコーナーができました。今号もご執筆下さいました皆様ありがとうございます。もし「私のところには自己紹介コーナーの執筆依頼など来ていない」という新入会員の方がいましたら、お手数ですが入会時に届けられたメールアドレスの受信トレイおよび迷惑メールトレイをもう一度確認して下さいませんか。ご執筆のご意志があれば、次号に掲載いたしますので原稿をお送り下さい。よろしくお願いします。

(甲木 善久)

- ・春ですね。新しい出会いにワクワクする季節がやってきました。今号もたくさんの人・本・学びの機会をご紹介します。この学会NEWSが新しい素敵な出会いのきっかけになりますように。ご執筆、ご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。

(宮崎 詞美)



イラスト：井之口 真央